

円仁と中尊寺の建立

仏僧、円仁（794-864 年）は、仏教を広めるため 829 年に東北地方を周遊しました。円仁は、京都の東にある天台宗の総本山・延暦寺で天台宗の開祖、最澄(767-822 年)に仕えた僧で、最澄の没後、天台宗の三代目の座主になりました。

9 世紀の初め、東北のほとんどの寺は奈良を拠点とした法相宗に属していました。法相宗は、自分の見ている世界は自分の心が作り出したものという考えをもち、哲学的な学問を重視していました。円仁は東北への布教の旅で、奥州藤原氏が後に発展させることになる、中尊寺や毛越寺といった寺の基礎を築きました。このように円仁は、天台宗をこの地に広めることに貢献したのです。天台宗は、人は皆悟りに至ることができるとし、この考えは多くの人に支持されました。

しかし、12 世紀初頭に藤原清衡（1056-1128 年）によって中尊寺が造営されるまで、東北地方では法相宗が優勢でした。中尊寺は、法華経と浄土思想の教えに基づく、延暦寺の天台宗の体系に沿って築かれた東北で最初の寺でした。奥州藤原氏は、中尊寺や平泉にあるその他の寺の造営を支援し、仏教の教えに基づいた平和な都市を築こうとしました。